

# Forex

株式会社 ジャパン  
エコノミックパルス  
〒103-0007  
東京都中央区日本橋浜町  
2-33-5  
Tel 03-5962-3910  
Fax 03-5962-3913  
www.j-pulse.co.jp  
info@j-pulse.info

# Market Insight

2026年3月16日（月）

## 全般ドル高と円安、持続と反動調整にらむ

### イラン、原油、円安対応策、各中銀会合など焦点

今週の為替相場は全般的なドル高と円安に関して、持続余地と逆方向への反動調整をにらんだ展開となる。週間予想はドル/円が157.50-161.80円、ユーロ/円が180.80-184.30円。前週以降は米国とイランの軍事衝突の長期化懸念などで、原油高とドル高が後押しされている。円相場はドル/円でドル高・円安が続き、クロス円取引は円の連れ安（非ドル通貨高）や円高抑制が見られている。今週はイラン情勢と原油相場の動向、日本の当局による円安阻止対応、豪加米英欧日の中銀会合などが焦点になる。

### 米10年債金利、13週・26週・52週平均が上向き、ドル支援

今週の為替相場で注目されるのは、米国イスラエル対イランの武力衝突と中東有事の動向だ。前週末には米国がイランの重要な原油輸出拠点であるカグ島を攻撃し、改めて原油の供給減少懸念と原油高、ドル高・円安の流れが後押しされている。

今後についてはイスラエル軍の報道官が15日、「さらに3週間は攻撃を続ける」と主張した。米国では国家経済会議（NEC）のハセット委員長が15日、「この任務の完了には4-6週間を要する」と説明している（15日からは3週目に）。

今週の為替相場では中東懸念等による全般ドル高と、ドル高・円安の持続、クロス円取引での円の連れ安（非ドル通貨高）や円高抑制に関して、持続余地を見極める展開となる。過熱調整や停戦観測の浮上等により、全般ドル安や全般円高に振れる局面も無視できない。

引き続きドル高やドル安抑制の要因としては、安全逃避のドル買い、原油高に伴う世界的なドル需要の増加（各国の原油取引はドル建て決済が中心）、原油・天然ガスの供給懸念と価格高騰による原油・天然ガス「産出国」米国の強み増大、米国による他国への米国産原油・ガスの売り込み強化（米国の貿易収支改善）、米国の国防・ハイテク産業の軍事特需、米国でインフレ上昇の要因となる可能性（米債金利の上昇要因。米FRBの早期利下げや今後の利下げ回数増加を阻害）、米国内外の株安懸念による投資マネーの米国回帰や国際分散投資の抑制（ドル離れ抑制）などがある。

反対に円安や円高抑制の要因としては、原油高を受けた資源輸入国・日本の経済と貿易収支の悪化懸念（日本の資源輸入では中東の依存度も高い）、原油高と日本でのインフレ上昇懸念による日本国債の価格下落（国債安・円安、金利は上昇）、日本での原油高等による物価再上昇の懸念と、他国比での低金利による実質金利の押し下げ（金利-物価、金利<物価の方向）、日本の経済や企業への打撃懸念による日銀の早期利上げ不透明感などがある。

一方でドル反落の要因としては、停戦観測の浮上や原油反落のほか、「戦争の長期化と泥沼化」が本格懸念される場合がある。泥沼化が懸念されてくると、米国の財政悪化、米国とトランプ米大統領の信認低下、原油高とインフレ上昇の持続による米国の景気悪化、FRBによる「インフレより景気重視」の早期利下げ観測や利下げ回数の増加などにより、ドル安圧力が強まる潜在余地も秘めている。

**WARNING!** 記事並びに情報はすべて株式会社ジャパン  
エコノミックパルスに帰属しています。無断転載及び転送  
は法的に罰せられますのでご注意ください。



〒103-0007 東京都中央区日本橋浜町2-33-5 マリオン浜町ビル  
TEL (03) 5962-3910 FAX (03) 5962-3913  
E-Mail info@j-pulse.co.jp URL http://www.j-pulse.co.jp  
発行責任者：上坂 郁 編集長：原田 祥二

る。

為替相場のドル/円に影響を与えるのが、米10年債金利の動向だ。3月からは原油高とインフレ上昇懸念、米国の財政悪化リスクなどで金利は上昇となっている（米債価格は下落）。週足テクニカルでは、13週（3カ月）、26週（6カ月）、52週（1年）の各移動平均について、上抜けと各ラインの方向角度の上向き化が見られ始めた。

このまま定着となれば、昨年3月以来の同時現象となる。各ラインの上抜けや上向きが維持されている限り、ドル/円は短期的なドル安の局面があっても、ドルの下限切り上がりやドル高の基調が持続となりやすい。その他の注目点は以下。

#### ＜ドル/円の週足、下値抵抗線の上抜け維持焦点＞

為替相場のドル/円は週足テクニカルで、昨夏以降の下値抵抗線の上抜け維持と、各ラインなどを下値メドとしたドルの下値固め、下限切り上がりが焦点になっている。ブルームバーグのレートによると、前週末3月13日時点の数値では、下値抵抗線として3週移動平均線157.81円、4週移動平均線157.11円、13週移動平均線156.62円、6週移動平均線156.38円、週足・一目均衡表の転換線155.90円などがある。

#### ＜クロス円、週足節目ラインの維持と下抜けにらむ＞

為替相場ではクロス円（円の対非ドル通貨）取引の週足テクニカルで、重要節目ラインの上抜け維持と下抜けをにらんだ展開となっている。

4週、6週、9週、13週といった移動平均線について、各ラインの上抜けや方向角度の上向き化が維持されている「対円での上昇トレンド持続」通貨としては、カナダ・ドル、豪ドル、ポンド、スイス・フラン、ノルウェー・クローネなどがある。

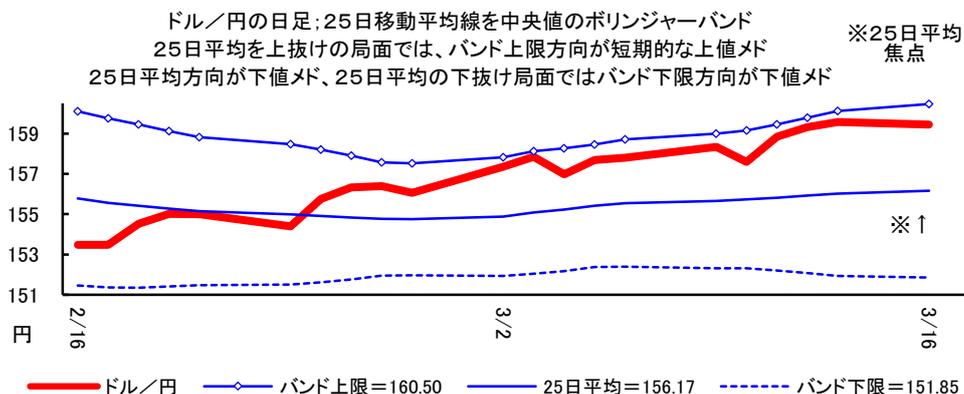
反対に各ラインの下抜けや方向角度の下向き攻防に直面している「対円での横這い化や下落通貨」としては、ユーロ、NZドル、南アフリカ・ランド、メキシコ・ペソなどがある。

#### ＜日本の円安阻止対応と日銀会合＞

今週以降の為替相場では、日本の財務省と日銀による円安阻止対応が焦点になる。円安が持続となる場合、当局幹部による「介入辞さず」を含めた円安牽制発言の強化や、財務省・金融庁・日銀による市場安定化に向けた三者会合の開催、日銀による4月利上げの地ならし強化（今週18－19日の日銀会合は現状維持の観測）、日本単独や日米協調によるレートチェックなどがある。

実弾介入は「限られた回数での介入で、一定期間の円安阻止につなげる」という成功が絶対条件だ。現状はイラン戦争に長期化の可能性もあり、早期の実施はハードルが高い。

今週18－19日の日銀会合は、現状維持が予想されている。ただし、利上げ賛成票が増加したり、会合後の植田和男総裁による会見で4月利上げへの前向き姿勢や円安警戒姿勢が強められると、短期的に円高となる余地がある。



前回1月の日銀会合では植田総裁の会見中や会見後の円安進展場面で、日本の当局による円安牽制のレートチェックが噂され、円高が加速された。その後のNY市場では、米国の当局によるレートチェックも観測され、大幅な円高進行となっている。今週19日も総裁会見の前後での円安進展と、当局の円安阻止対応を受けた円高加速には注意を要する。もしくは総裁会見前後での円安進展と、日米当局の「対応見送りと肩すかし」による一段の円安加速といった波乱も無視できない。

### <豪加米英欧の中銀会合>

今週は世界各地で中銀の政策会合が相次ぐ。現状の原油高等によるインフレ上昇を警戒した利下げ慎重化や利上げ方向（タカ派）と、資源高や地政学リスク等による景気悪化を懸念した利下げ継続や利上げ慎重姿勢（ハト派）のバランスの取り方が焦点になる。

17日の豪中銀は利上げが予想され、今後も利上げ継続が注目されている。豪ドルは上昇基調の持続が意識されやすい。17日の会合後には一旦の材料出尽くしや、予想ほどタカ派でない姿勢などによる短期豪ドル安の可能性もある。それでも先行きの利上げ余地により、豪ドルは下限の切り上がり余地がある。

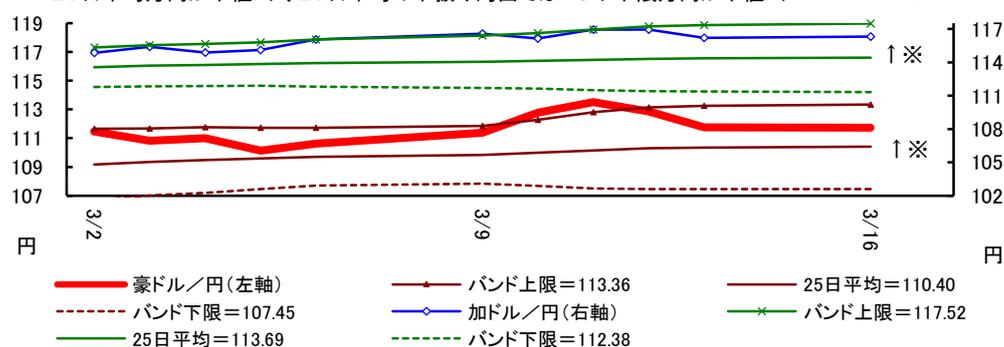
18日のカナダと米国、19日の英国とユーロ圏については、インフレ上昇と雇用・景気悪化の両リスクに目配りした「両にらみ」が想定される。ただし、いずれも昨年までの利下げ局面について「終盤入り」示唆の可能性があり、各通貨ともに会合前後で下落があっても、対円では下げ止まりから下限切り上がりにつながる余地がある。

豪ドル/円とカナダドル/円の日足：25日移動平均を中央値のボリンジャーバンド

25日平均を上抜けの局面では、バンド上限方向が短期的な上値メド

25日平均方向が下値メド、25日平均の下抜け局面ではバンド下限方向が下値メド

※25日平均  
焦点



お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。本レポートの内容は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。